夏の前で一人足踏み

「僕のために春がきた」

そう思っていたころの僕を形づくる曲線は
えんぴつの4Bくらいの濃さだった

幸福はいろんな色の絵の具を混ぜた
うつくしい極彩色で

不幸は「ふこう」とラベルのついた
一色のアクリル絵の具のことだと思ってた

でも春は永遠のうちのたった四分の一で
新しい祝福の前には雨が降る

降りそそぐ雫はぽたぽたと
僕を描く線の上に落ちていって

大人になればなるほどぼやけていくのは
世界との境界線と語尾

もう「僕のために」とは思えないけれど
願わなくとも季節は巡る

花びらは葉に、涙は汗に
僕のことばは透明に

でももう少しだけここにいさせて

沈黙のレースで縁取った
やわらかい欺瞞を抱きしめて

はるに

水面